講義 7

テーマ

大学生だからできる復興支援

講師

あかざわ　きよたか
赤澤 清孝氏

特定非営利活動法人
ユースビジョン
代表

阪神・淡路大震災を契機に、若者によるボランティア活動の意義や可能性を感じ、翌年学生有志できょうと学生ボランティアセンター（現・NPO法人ユースビジョン）設立。学生の活動支援の他、東日本大震災後には宮城県を拠点に復興・まちづくりに取り組む起業家の支援に取り組む。

まとめ

地元大学の学生は、地域住民にとっては他人ですが、他府県の人たちと比べると、やはり地元の子だと言われる部分があります。そのような絶妙な立場を生かして、地元の住民への寄り添い活動を続けてもらいたいと思います。また、地域外のヨソモノ学生を地域につなげられるのは、やはり地元の大学や学生の力が大きいと思いますので、そのような役割もぜひ担ってほしいです。そして、関心を持ち続ける、それが相手に伝わることも復興の支えになります。卒業後、関われる時間が少なくなったとしても、関心を持ち続け、なにがしか年賀状だけ送ってみるなどでも良いと思いますが、そのようなご縁・つながりを大事にしてもらえると良いと思います。

今日は、大学生は何ができるのかということを考え、東北やそれ以外の取り組みも含め、今後熊本でもモデルになるのではないか、参考になりそうな団体を幾つか紹介したいと思います。

大学生の取組み①　ボランティアチームTASKI

宮城県名取市の尚絅学院大学は、震災後に、学生の自主的な活動を応援しようと、ボランティアステーションという組織をつくりました。そのサポートを受け、学生がTASKIという名前のボランティアグループをつくり、活動しています。TASKIという名称は、たすき掛けに由来しています。

地元の仮設住宅等を訪問し、集会所で、皆でご飯を食べたり、カラオケ大会を企画したりといった活動を定期的にしていました。それ以外にも、被災した小さな子どもを持つお母さん方を対象に、お母さんに少し余裕を持って生活してもらえるような時間を作ってあげたいと、仮設住宅や地元の保育園などにお手伝いに行くことで、子どもと親、あるいはそこで働いていらっしゃる方のケアにつながる取り組みをしています。ボランティア活動から始まっているのですが、大学側から見ると地域の方たちから意見をもらったりデータを取ったりすることは、本業の勉強にもつながるため、学生の自主的な取り組みと大学の授業として地域に出て行くことを組み合わせ、活動が発展しています。

東日本大震災以降、それぞれの生活の変化に合わせて活動を少しずつ変えながら継続的に活動しているので、活動の資料を見てもらうと、次どのような生活に移るのか、どのような支援活動をしていったら良いのかということが参考になるのではないかと思います。

大学生の取組み②　「いるだけ支援」

2つ目は福島大学です。もともと京都の社会福祉協議会にもいらっしゃった鈴木さんが、震災前から教員をされています。そこで始めた取り組みは、「いるだけ支援」という仮設住宅に学生が一緒に住むという取り組みです。ずっと住んでいるわけではありませんが、学生が3カ月ごとなどのローテーションで住み、そこから大学に通っています。孤立死や震災関連死、自殺などを無くそうという取り組みです。もともと高齢者が多い地域の場合は、仮設住宅に移り住んでいる人たちも年配の人が多いので、若い人がいません。そこに学生が実際に住んでお手伝いに行く、そのような取り組みです。

いるだけ支援というのですが、学生がラーメンばかりしか食べていなかったら、ちゃんとしたものを食べないといけないと言ってご飯を作りにきてくれるなど、いろいろ世話をしてくれます。学生の側が、ちょっとした家の片付けや改修などを手伝うこともあります。

ユメナビというサイトで、鈴木先生が「いるだけ支援」について話している動画がありますので、「いるだけ支援」「動画」で検索し、参考にしてください。そのなかで、鈴木先生が言っていらっしゃるのは、外から通いながら支援していると、地元の人もその時間は頑張って楽しく過ごして「ありがとう」というが、帰った後また寂しい気分になったりする、生活の中でぽろっとお話しすることに困りごとや大切なことが含まれているということです。住んでみないとなかなか見えてこないことがあるとも言ってらっしゃいます。共に暮らすことで、引きこもりがちな人の気持ちが少しずつ分かるようになったり、学校の休みの日はお菓子を作ったり、学生自身も日常生活をする中で、地域の人たちとお話しする力も付いていきます。仮設住宅は被災された方たちのためのものなので、通常は学生が住むことはできないのですが、寄り添いの趣旨でやってみようと、空いている部屋に住ませてもらっているそうです。

大学生の取組み③　石巻専修大学

次に、宮城県石巻市の石巻専修大学では、仮設住宅の実態調査を行っています。行政の方が調査員として調べる調査もありますが、専門家が調査に来ると、聞かれるのが先に立って、なかなか自然なおしゃべりができません。

石巻専修大学では、平成23年度から、どのような

方がどのような居住形態で住まわれているのか、世帯別の構成、同居家族の死亡・不明など、いろいろなことを丁寧に聞き取りしています。学生の聞き取りは完璧ではなく、たどたどしい部分もあるのですが、逆にそのほうが、相手が頑張って答えようという気分になる不思議なところもあるようです。学生が来て一生懸命聞いてくれているからきちんと答えないと、と、ある意味学生のアマチュアさ、素朴さのような部分が被災された方の中から湧き上がっている気持ちや言葉を引き出している部分もあるのではないかと思います。

調査ではありますが、これ自身が一つのコミュニケーションの方法であり、行政が行う調査ではなかなか見えない部分を補完する動きもあると思います。このような仮設住宅への調査の他、子どもの声や思いを聞き取るアンケートを行うなど、さまざまな立場の人たちの思いや気持ちを引き出すような活動もしています。

石巻専修大学の場合、実際にアンケートを採って終わりではなく、そこで聞いて出てきたニーズに合わせて、新しい活動をつくっていったり、新たに学生団体が生まれていったりという派生した効果も生まれています。

大学生の取組み④　学生DASH村

次に紹介するのは、避難生活からもう少し先に進んだ、フェーズでいうと、3番目の復興支援期につながっていく取り組みでもあります。住民の方たちが、次の新しい町づくり、村づくりに向けて動きだそうという意欲がある、しかし自分たちだけではなかなか知恵も力も足りないという場合、学生が一緒に参加して、地域の人たちの新しいチャレンジを応援しようという取り組みです。

もともと福島県は某番組のDASH村という企画がありました。それにならい、学生DASH村という名称で、休耕地を新たに使えるようにしたり、空き家を改修して宿泊スペースを作ったりということを通じて、新しい村づくり、グリーンツーリズムに取り組み、若い人に来てもらえるような仕掛けを行っていこうとしています。今まで学生はいなかった、学生が少なかった地域に、震災が縁で若者が来てくれるようになったので、それをご縁に新しい町づくり、仕事づくりを進めていこう、という事例です。

大学生の取組み⑤　広島修道大学

広島市でも豪雨災害があり、安佐北、安佐南という住宅地として造成した地域で土砂崩れが起こりました。すぐ近くにある広島修道大学の学生たちが、最初の段階で、全然ご縁のないなかで支援活動をするのは難しかったという教訓を踏まえ、普段から地域の人たちとつながりがあれば、今後も同じような災害が起こったときに迅速に動けるだろうと、緊急支援の後も、そのとき活動した学生と、地元の自然学校などのメンバーが一緒に、その後の地域づくり、町づくり活動を行うためのNPOを立ち上げました。

空いている建物などを皆でリノベーションし、地域の中に学生が活動できるための拠点、地域の人と一緒に防災や手仕事の講座をするための民間の施設を造って、豪雨災害をきっかけに一緒に活動を始めています。これも非常に面白いと思いますし、エリアによってはこちらの事情にも合うところもあるのではないかと思います。ホームページも充実していますので、これもぜひ参考にしていただきたいと思います。

ヨソモノ学生を地域につなげられるのは地元学生

今日は、熊本大学と県立大学、地元の大学の方に来ていただいていますが、地域の外から支援に入ろう、他県の学生も応援に入ろうと思ったときに、普段そこにいるわけでなく、条件も分からず関わりづらいということがあります。そのときに他県の学生を熊本につなぐという意味では、地元の学生や大学の力は非常に大きいと思っています。緊急支援のときのみならず、日常に近いところの支援活動の場合は、ますます入りづらい、ニーズが見えづらいという状況があります。

大きな行事などをしようと思うと、地元の学生だけでは足りない場合もあります。例えば夏祭りや運動会をする場合には、他県の学生なども当てにしながら活動を組み立てていくことで、他県の学生とのつながりをつくることもできると思います。

卒業後の関わり方 ～ご縁を大切に～

地域の人たちとご縁ができてしまうと、地元の人たちだけでは足りない部分が、自分が参加するともっと進むのではないかと、去り難い部分もあるかと思います。

東北の事例で、学生がそのまま復興支援団体を作って活動しているケースもあります。岩手GINGA-NETという団体は、2011年に全国から学生ボランティアが集まり、仮設住宅の生活支援などを始めたのですが、その後も活動を継続していく必要があると、当時4年生だった八重樫さんが、卒業間際にNPO法人を設立して、継続的に活動する団体になりました。2012年以降も、特に春休みや夏休みなどを中心に、全国からのボランティアらが現地で活動ができるように、現地との調整や宿泊場所の手配をするなど、活動を続けています。当初は外から活動する学生が多かったのですが、現在は地元岩手の盛岡大学、岩手大学、他の岩手県内の大学生たちなども巻き込みながら活動を継続しています。

その他、自分たちでつくらなくても、現地の復興支援団体と一緒に活動を継続しているケースもあります。また、地域おこし協力隊として地域に残る方法もあります。これは、震災に限らず、地域の町おこし、観光振興、新しい産業づくりなどのテーマのもと、行政の嘱託職員のような形で一定期間その地域に住みながら、地域の復興に関わる仕事です。

東北でもボランティアがきっかけで、その地域とご縁ができ、そのまま移住した若者も多くいます。最近は国が地方創生で、移住や定住支援の取り組みをしていますけれども、実際にボランティアを通じて移住した若者たちが、そこの移住促進のセンターの職員になっているケースもあり、外から来る新しい若者たちと地元の人たちをつなぐ媒介役になっているケースもあって面白いと思います。

もちろん地元で就職するのも大事なことだと思います。地域の経済活動を支えることも大事だと思いますし、いざというときには企業等の協力も必要だと思います。機材や物流など、そのようなものを企業からご支援いただくことで復興の活動がスムーズになりました。

さらには、復興支援に限定せず、多様な活動に参加するのも良いと思います。震災時のみならず、普段の生活から、高齢者や子育て中の方、障害者など、困難を抱えている方はおり、その方々が被災するとさらに生活が大変になります。そのような意味では、地域や社会の課題は様々あり、地震のあるなしにかかわらず、困っている人、大変な人はたくさんいるわけです。ですから、どのような活動であっても、このように人に寄り添う、あるいは必要な活動や企画を考えるのは、どのような活動も震災でのボランティアの経験を生かせると思いますし、その逆もあり得ます。普段からそのような地域の人たちの課題が分かっていて、なにがしか困っている人の支援をしていることが、実際に震災のときも困っている人にどうすれば良いかと想像力が働くという部分につながると思います。

まとめとして、今日、皆さんにお伝えしたいのは、ひとつは地元の学生は大事だということです。他府県の人たちと比べると、やはり地元の子だと言われたりする部分があると思います。そのような絶妙な立場を生かして、地元の住民への寄り添い活動をぜひ続けてもらいたいと思います。ヨソモノ学生を地域につなげられるのは、やはり地元の大学や学生の力が大きいと思いますので、そのような役割もぜひ担ってほしいと思います。

それから、卒業後も、そのご縁も大事にしてほしいと思います。東北などを見ていると、報道がどんどんオリンピックに移り、忘れられているのではないか、来てくれる人が少なくなって寂しいという思いを持っている人もいます。テレビでの放映も少なくなって、もうとっくに復興して普通の生活に戻っているのではないかと思っているかもしれませんが、案外そうでもない部分もありますので、やはり関心を持ち続ける、それが相手に伝わることも復興の支えになると思います。関われる時間が少なくなったとしても、関心を持ち続けて、なにがしか年賀状だけ送ってみるなどでも良いと思いますが、そのようなつながりは大事にしてもらえると良いと思います。